

学会報告優秀賞

это と人称代名詞の照応機能について —— 名詞句の照応をめぐる一考察 ——

三 谷 恵 子

0. 問題設定

本稿では名詞または名詞句（以下まとめて NP）の照応形として用いられるロシア語の人称代名詞および代名詞の это の機能について考察した。周知のように、通常 NP の照応形として用いられるのは所謂人称代名詞（ロシア語では он/она/оно/они）（以下 PP3 と略記）である。ところが PP3 ではなく это が NP の照応形として用いられる場合がある：

001) Через часа три или четыре, поближе к сумеркам, в стороне от дороги в поле как из-под земли выросли две фигуры, которых раньше не было на поверхности, и часто оглядываясь, стали быстро удаляться. Это были Антипов и Тиверзин. [Пастернак, 28]

ここで照応形 это の先行詞は先行文脈の NP: две фигуры である。にも係わらずここでは照応形として PP3（この場合 они）が用いられていない。このような現象から、это と PP3 の NP 照応形としての機能分布、即ち、いかなる文脈的条件下でどちらの照応形が選択されるか、という問題を考察した。以下、1. 一般論としての任意の NP とその指示対象の関係、2. это の機能、3. NP の照応形としての PP3 と это の機能分布、の順で論じていく。

1. 指示と指示対象

照応の代名詞の機能について考える前にまず、任意の NP とその指示対象の関係を明らかにする。なお本論では具体的な指示対象を表しうる NP のみを考察の対象とする。

具体的な指示対象を表す NP は、その語彙的意味を介して何らかの指示対象に対応するが、表現形式 NP と指示対象の関係は多くの場合多義的である。「日本人」という表現は集合 J（日本人）全体への指示として用いられるか、または集合の中のある個体 J(X) [X は日本人である] を表す。今、前者をカ

テゴリー的指示 (CAT), 後者を個体的指示 (INDV) とする。個体的指示には、ある特定の個体 X_p を指示する場合と、集合の任意の元 X としての個体を指示する場合がある。そこで前者を定的 (DEF), 後者を不定的指示 (INDEF) とする。カテゴリーへの言及と個体への指示は異なるが、日常言語の感覚では不定指示とカテゴリー的指示の境界はしばしば曖昧である (図中で不定指示が CAT と INDV の中間にあるのはそのことを意味している)。不定指示では、指示対象がある集合の元であること以上に個体に関する情報を与えないのに対し、定的指示は特定の個体への言及であるからその個体に関する情報、つまり話者および聞き手の、指示対象に関する知識が関与的である。表現 DEF (X_p) においては、発話の言及時点で個体 X_p は (1)話者 i , 聞き手 j 双方に於いて特定化されている (既知である), (2)話者 i のみが知っていて、聞き手 j にとっては未知、あるいはそれを特定するに十分な情報を与えられていない, (3)聞き手のみならず話者にとっても未知, の3通りである。(1)を話者, 聞き手双方において特定済みの指示 ($SPC_{i/j}$), (2)を聞き手 j にとって未特定 ($NotSPC_j$), (3)を話者聞き手双方にとって未特定の指示 ($NotSPC_i$) とする。定指示 DEF と不定指示 INDEF との最大の違いは前者が基本的に指示対象の存在 (所与の特徴を充たす個体が発話世界の領域において存在すること) を前提するのに対し、後者では必ずしもそのような前提は問題とされないという点である (「研究の助手になる人を探している」という時そのような資格を満たす個体は存在しなくともよい)。話者において特定済みと未特定の場合の違いは、Donnellan が指摘した Referential と Attributive の対立に相応する。⁽¹⁾ “The man who killed Smith must be insane.” という時、話者が具体的な人物を想定して語るならばこれは Referential な表現であり、一方、話者の知識はスミスを殺した男がただ一人存在する (少なくとも話者の確信において) という事実のみで、それが何者か知らない場合には、話者の指示対象に関する知識は限定的 (「スミスの殺害犯」という一つの特徴の担い手としてのみ理解されている) で、このような表現を Donnellan は Attributive であるとした。

文脈上のある時点で指示対象が特定済みか未特定であるかに関しては話者と聞き手の間にギャップがある。これが $NotSPC_j$ の部分、すなわち、話者は指示対象の実体を知っているのに対し、聞き手には、その文脈で語られる特徴の担い手という、部分的な姿でしか把握されていない状態である。このギャップは普通文脈の進行と共に埋められ、話者が聞き手に対象を特定化するに十分な情報を与えるか、あるいは対象が聞き手にとっても特定化されたと話者が判断

すれば、その時点で $SPCi/j$ となる。 $SPCi/j$ はこの様に文脈上の情報の累積によって、または文脈外の共通の知識（十分によく知られた固有名詞など）によって与えられる。要は、指示対象が $SPCi/j$ であるとは結局、話者聞き手双方が指示対象を、さまざまな特徴の総和としての個体（これを「全体像」と呼ぶ）として理解していることを意味し、 $NotSPCn$ (n は j か i) では指示対象は、聞き手または聞き手話者の双方にとって、文脈で語られる情報のみの担い手、言い換えるならば文脈関与的な特徴の担い手として把握されるということである。この違いは「全体像 vs. 部分」「特徴の総和 vs. 文脈関与的な一つの特徴」という形で捉えることができる。

これらの特長は下の I 図にまとめることができる。

2. это の機能

2.01. это の、単独で用いられる（形容詞的指示代名詞の中性形でない）時の機能は次の 3 つである。

- (1) 強意の助詞としての機能（“Как это я про него забыл?” “О чем это он все думает?” における это, あるいは連辞に先立つ位置で用いられる

【I NP と指示対象の関係】

	個体的指示 (INDV)		カテゴリー的指示 (CAT)	
	(時点 t で) 定 (DEF)		不定 (INDEF)	
	話者において 特定済み (SPCi)	話者において 未特定 (NotSPCi)		
	聞き手におい て特定済み (SPCi/j)	聞き手にお いて未特定 (NotSPCj)		
(個体の) 存在的前提	有効		無効	
情 報 度	高 —————→ 低			
対象への 理解	特長の総和, 全体像	言及時点で与えられた 情報のみ, 文脈関与的 な特徴の担い手	集合の任意の 元	カテゴリー
			としての把握	

もの)。

(2) 直示的指示語としての機能 (ex. “Познакомьтесь, это моя жена)。

(3) 照応の代名詞としての機能。照応形の это は①先行文脈の話題・内容や、先行文脈から類推可能なものをあらわす、②二項名辞文で NP の照応形となる、の 2 通りの場合がある。①の様な照応を今、文脈照応とよぶ。

2.02. 文脈照応の это

文脈照応の это は主として先行文脈の話題・内容や、さらには前後の文脈で語られる状況に対応する：

201) Мне теперь хочется рассказать вам, господа, желается иль не желается вам это слышать, почему я даже и насекомым не сумел сделаться. [Достоевский, 101]

この様な文脈照応の現象は自然言語一般に特有の現象であり、文脈の内容やそこから類推によって得られる事柄を照応表現によって置き換える、あるいは逆に照応の形式から先行文脈を回復させる能力が人間の言語能力のなかでどう位置づけられるかは近年の認知言語学における注目点の一つである。⁽²⁾

文脈照応の это は PP3 と同じく、任意の NP と同じ統語位置を占める。従ってこれを含む文の統語関係に従って格変化し、主語の位置に立つ場合、述語動詞は это に形式的に一致して中性単数形となる：

202) Человек смертен, никто против этого и не спорит.

[Булгаков, 431]

203) Впрочем это случилось еще в моей молодости.

[Достоевский, 100]

このような文脈照応の это とは異なり、NP を先行詞とする照応語として用いられる場合がある。以下ではこの照応形について検討していく。

3. NP 照応の это と PP3

3.01. まず NP 照応の это が現れる場合の統語的制約を見ておく。

(1) NP 照応の это は、連辞を介して結ばれる 2 つの NP からなる文 ([NP₁-COP NP₂] の型の文：以下、二項名辞文とする) の第一成分 NP₁ の位置に限り現われる。⁽³⁾ これに対し PP3 は、任意の NP の照応形として統語構造の限定なく用いられ、さらに二項名辞文では連辞を挟んだどちら側にも現れる：

Это — убийца старухи. *Убийца старухи — это.

Он убийца старухи. Убийца старухи — он.

(2) NP 照応の *это* では、連辞の形態は第二成分の文法的特徴と一致する。また、*это* が用いられる場合第二成分に造格は現れない。⁽⁴⁾ 第二成分に造格が現れるのは文脈照応の *это* の場合のみである (ex. Это было началом второй мировой войны.)⁽⁵⁾ 一方、PP3 が用いられると、連辞の形式は主語である PP3 の性数と一致し、連辞の時制が非現在の時、述部の名詞は主格または造格で表される (ex. *Он был инженер/инженером*)。

3.02. 上記のように、冒頭言及した PP3 と *это* の NP 照応の機能分布の問題は、結局、二項名辞文という環境において論じられる、という特性をもつ。そこで二項名辞文に現われる NP 照応の形式としての(1) *это* と PP3 の機能分布、(2) *это* と PP3 が競合する場合、について、照応形の先行詞の NP の指示特性に注目し、先の 1 の分析を利用しながらまとめてみた。

(1) *это* と PP3 の機能分布。

個体的指示 [INDV] で、SPCi/j でない NP を先行詞とする場合、照応形には *это* が用いられる。次の 301) 302) は NotSPCj (これらの場合聞き手 j はテキストの受け手) である NP を先行詞とする照応形 *это* である：

301) К могиле прошел человек в черном, со сборками на узких облегающих рукавах. Это был брат покойной и дядя плакавшего мальчика, расстригенный по собственному прощению священник Николай Николаевич Веденяпин. Он подошел к мальчику и увел его с кладбища. [Пастернак, 3-4]

302) Трамвай накрыл Берлиоза, и под решетку Патриаршей аллеи выбросило на булыжный откос круглый темный предмет. Скатившись с этого откоса, он запрыгал по булыжникам Бронной. Это была отрезанная голова Берлиоза. [Булгаков, 463]

また、303) 304) のように話者 (= 二項名辞文の発話者) にとって未特定の指示対象を先行詞とする場合にも *это* が用いられる。これらのように二項名辞文が疑問文の時、直接の聞き手 (= 疑問文の向けられる相手) にとっては対象が特定済み (従って話者にとってのみ未特定) という状況がありうる。これは対話型のテキストで聞き手と話者が入れ替わる時に生じるが、この場合照応形の選択に関与的なのは話者の立場 (話者にとって未特定) のみで、指示対象が聞き手にとって特定済みであるか未特定であるかは問題とされない：

303) Вы Берлиоза знаете? — спросил Иван многозначительно. — Это...

композитор? Иван расстроился. — Какой там композитор? Ах да, да нет! Композитор — это однофамилец Миши Берлиоза!

[Булгаков, 485]

304) Вся свита оказывала ему знаки внимания и уважения, и вход его получился поэту очень торжественным (...) Да, это был, несомненно, главный. Он сел на табурет, а все остались стоять.

[Булгаков, 504]

以上から次のような文脈的状况を設定することができる：二項名辞文の主題は先行文脈で話題とされる NP だが，その指示対象は聞き手または／かつ話者にとって未特定 (NotSPCn) [n は j または i] で，それが，続く二項名辞文で特定化されるか，何らかの特徴付けを与えられる。このような場合二項名辞文に現われる NP 照応の形式は это である。

これに対し，PP3 は先行詞の指示対象が話者聞き手双方にとって特定済み (SPCi/j) の場合に用いられる（先に言及したように，この場合，連辞が非現在形であれば述部の NP は主格または造格となるが，この述語形式の違いはここでは問題としない）：

305) Да ведь, Арчибальд Арчибальдович, труся, отвечал швейцар, — как же я могу их не допустить, если они — член МАССОЛИТа?

[Булгаков, 481]

306) Вокруг института (...) жило немало литераторов. Почти каждое утро возле нашей двери вырастал уныло долговязый поэт Рудерман. — Дайте закурить, ребята. Он был автором повально знаменитой песни <Тачанка>.

[Тендряков, 128]

1 で，NP の指示特性が SPCi/j であるとは，話者聞き手双方がその指示対象を特徴の総和＝全体像として把握していることを意味し，NotSPCn とは聞き手または／かつ話者が指示対象を，その全体像に関しては未知のまま，文脈関与的な，即ち文脈で語られるある特徴の担い手としてのみ理解することであると定めた。この関係は二項名辞文の照応形にもそのまま投射される。つまり PP3 の使用は，その指示対象（＝先行詞の指示対象）を SPCi/j としての全体像として指示することを意味し，一方 это の使用は，先行文脈で語られる状况の担い手という文脈関与的な特徴の主体を先行詞とし，同時にその主体の実体（＝全体像）については何も語らないことを意図するのである。そこで，話者

が自分についての二項名辞文を発する場合には必ず PP3 が用いられる：

307) Колька решил, что он — неудачник, и это его несколько успокоило. [Эренбург, 160]

[*Колька решил, что это неудачник.]

308) Продолжаю, — сказал Иван (...) этот страшный тип, а он врет, что он консультант, обладает какою-то необыкновенной силой... [Булгаков, 506]

[*он врет, что это консультант]

このような状況でもし это を用いたならば это の先行詞は本来の先行詞、つまり二項名辞文の話者ではなく、何か別のものであると理解されるであろう。

上記のような это と PP3 の照応機能の基本的な違いのために、это を用いた場合と PP3 を用いた場合で照応関係に違いを生じる場合がある。次の 309) 310) のようなケースで：

309) И привидение, пройдя в отверстие трельяжка, беспрепятственно вступило на веранду. Тут все увидели, что это — никакое не привидение, а Иван Николаевич Бездомный — известнейший поэт. [Булгаков, 479]

[это : = то, что вступило на веранду ; : ≠ привидение]

310) Вошла медсестра. А мы думали, что это доктор.⁽⁶⁾

[это : = тот, кто вошел ; : ≠ медсестра]

это の位置に PP3 を用いると、その先行詞は先行文脈で語られる名詞 [309) では привидение, 310) では медсестра] となり、しかもそれらは SPCi/j であると理解される。この解釈では、309) は оно [: = привидение] — никакое не привидение, а И. Н. Б. 「その幻は幻でなく И. Н. Б. だった」という奇妙な関係になり、310) は мы думали, что она [: = медсестра] доктор. 「彼女 (= その看護婦) を先生だと思った」となって発話の意味が変わってしまう。ここで注意すべきなのは、это の先行詞が先行文脈で言及される NP そのものではなく、そこで語られる行為あるいは状況の担い手 (ヴェランダに入ってきたもの / 部屋に入ってきた者) であり、その実体について二項名辞文で始めて言及されるという点である。この様な状況で это に替えて PP3 を用いることはできない。

先行文脈の状況の担い手を先行詞とする это の機能は次のように、先行文脈に先行詞となるべき NP が明示されない場合に明瞭に発揮される。この場合

PP3の使用は完全に排除される：

311) С трапа слышались шаги. Это был наш начальник.

*Он был наш начальник/начальником.

(cf. Падучева, 79)

[это := タラップからの足音 (の主) :]

照応形 это はまた、先行詞の NP の指示特性が INDEF の場合にも対応する：

312) Она должна была взять помощника. Это должен был быть умный и порядочный человек. (cf. Селиверстова, 39)

313) Богатые вельможи, посещавшие Западную Европу, привозят с собой иностраннных поваров. Вначале это были большей частью голландские и немецкие, особенно саксонские и австрийские, затем шведские и преимущественно французские.

[Национальные кухни, 10]

(2) PP3 と это が競合する場合

前節で、二項名辞文では先行詞が SPCi/j である場合には PP3 が、それ以外の場合 это が照応形として用いられることを明らかにした。ところで、это は先行詞が SPCi/j であるときにもしばしば用いられる。以下はその例である：

314) Варя Тимашова кончила в прошлом году педтехникум. Она учительствовала на стройке. Ей было девятнадцать лет, и она любила переводные романы. Она думала, что она похожа на Ингеборг Келлермана. (...) Она никак не походила на Ингеборг. Это была курносая русая девушка, с крепкими икрами и с добрым сердцем.

[Эренбург, 155]

315) Недавно моя первая женщина умерла. В похвалу ей скажу: это настоящая женщина.

[Горький, 117]

この SPCi/j の先行詞に対応する場合の это と PP3 の機能的な違いについて Селиверстова は、先行詞となる NP の指示対象から、状況を形成する要素としての特徴を切り離す文体的効果を指摘している。⁽⁷⁾ この指摘は前節で明らかにした照応形の基本的な意味の違い、即ち PP3 が SPCi/j である NP を先行詞としその指示対象を一つの全体像（特徴の総体）として指示するのに対し、

это は先行文脈で語られる行為の主体、関与的な特徴の担い手を先行詞とし、その実体については何も語らない、とした図式と一致する。この考えに従えば、SPCi/j の NP を先行詞とする это の使用は、文脈で語られるある特徴を持った個体を、ただその特徴の担い手として、特徴の総和である全体像から切り離してとりだす効果を持つことになる。このことが実際にどのような効果を生じるか（指示対象に対する話者の客観的な視点、距離感などの微妙な差異⁽⁸⁾）は個々の文脈状況、話者の選択に依存する。

3.03 CAT の指示特性を持つ NP を先行詞とする場合について。

この場合にも、это が用いられる：

316) До сих пор популярен старинный обычай выставлять на стол праздничное угощение — пироги. По ним нередко судят о кулинарных способностях хозяйки. А ведь когда-то это была крестьянская полевая пища, сделанная на скорую руку. [Наука в СССР, 73]

317) Он не любил англичан, утверждая:— Это нация ленивая, она ничего не выдумала. [Горький, 106]

一方、上例と類似した状況で、CAT として言及される NP に対する照応形として PP3 も用いられる：

318) Возглавлявшая восточную церковь Византия была вынуждена отстаивать кислый, чтобы не лишиться поддержки Руси, для которой он был символом национальной самобытности.

[Наука в СССР, 72]

319) Чукчи не любят путешествовать. Они домоседы.

(Падучева, стр. 83)

ある指示対象を CAT として言及することは対象を類概念として捉えることである。従って、上述した個体指示の場合の NP と同レベルで論じることはいできない。これは具体的な指示対象を持たない NP の場合と合わせてさらに検討を要する問題であろう。

4. 結 論

3 で述べた事柄をまとめると結局、個体的指示を意図する二項名辞文では SPCi/j の NP を先行詞とし、かつそれを全体像のまま指示する場合にのみ PP3 が用いられ、それ以外の場合 это が用いられると見ることができる。この関係を、NP と指示特性の関係をまとめた先の I 図に重ねると次の図 II のよ

【Ⅱ 二項名辞文における照応形と先行詞の NP およびその指示特性の関係】

	個体的指示 (INDV)		カテゴリー的指示 (CAT)	
	(時点 t で) 定 (DEF)		不定 (INDEF)	
	話者において 特定済み (SPCi)	話者において 未特定 (NotSPCi)		
	聞き手におい て特定済み (SPCi/j)	話者におい て未特定 (NotSPCj)		
(個体の) 存在的前提	有効		無効	
情 報 度	高 —————→ 低			
対象への 理解	特長の総和, 全体像	言及時点で与えられた 情報のみ, 文脈関与的 な特徴の担い手	集合の任意の 元	カテゴリー としての把握
二項名辞文 での照応形	PP3 это	это	это/ PP3	

うになる。

注(1) Donnellan, “Reference and definite description”, *The Philosophical Review*, 1966, vol. 75, no. 3, pp. 281-304.

(2) この点に関しては例えば：寺津典子「言語理論と認知科学」，渕一博編『認知科学への招待』，NHK ブックス，1983，第三章（推論による照応）。

(3) Падучева は例外的に先行詞が動詞派生の中性名詞の場合，二項名辞文以外の構文でも照応形として это が用いられるとしている：Проведение диалога между этими странами становится неизбежным. Этого требует большинство Совета членов Безопасности. しかしこの場合の это が確かに NP の照応形かどうかは明らかでない。ここでは先行詞の性格上その意味内容が文脈の内容と一致しており，これも文脈照応の一つとする方が自然であるように思われる；Падучева, Е. В., “Значение и синтаксические функции слова это”, *Проблемы структурной лингвистики*, 1980, стр. 89.

(4) 平行的な現象はたとえば NP_i COPL NP_j のタイプの文で第二成分を造格にするのが義務的であるポーランド語でもみられる。即ちこの構文で一方の成分に to が用

いられ *to jest* の形になるともう一方の成分も主格で現れる : ex. *Wiesław Golas/on jest aktorem* ; cf. *To jest student* ; *Gramatyka współczesnego języka polskiego* II, Warszawa, Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1984, str.144-145.

- (5) この点に関しチェコの79年文法では文脈照応の *это* と NP 照応の *это* の混同が見られる ; *Русская Грамматика*, Praha, Academia, 1979, II, § 1026.
- (6) Падучева, Е. В., “Местоимение *это* с предметным антецедентом”, *Проблемы структурной лингвистики*, 1979, стр. 83. (本文中の Падучева は上記 3 の文献でなくこちらを指す)
- (7) Селиверстова О. Н., *Местоимения в языке и речи*, М., Наука, 1988, стр. 40-42.
- (8) Падучева, “Местоимение *это*...”, стр. 81.; Селиверстова, op. cit. стр. 42.

参考文献

- Падучева, Е. В., “Местоимение *это* с предметным антецедентом”, *Проблемы структурной лингвистики*, 1979, стр. 72-88.
- Падучева, Е. В., “Значение и синтаксические функции слова *это*”, *Проблемы структурной лингвистики*, 1980, стр. 76-91.
- Русская Грамматика*, Praha, Academia, 1979, II.
- Селиверстова О. Н., *Местоимения в языке и речи*, М., Наука, 1988.
- Donnellan K. S., “Reference and definite description”, *The Philosophical Review*, 1966, vol. 75, No. 3, pp. 281-304. ロシア語訳 : *Новое в зарубежной лингвистике*, 1982, XIII, стр. 134-160.
- Gramatyka współczesnego języka polskiego*, Warszawa, Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1984, II, Składnia.
- Kuno S., “Some properties of non-referential noun phrase”, *Studies in General and Oriental linguistics*, Tokyo 1972, pp. 348-373 ; ロシア語訳 *Новое в зарубежной лингвистике*, 1982, XIII, стр. 292-339.
- Seuren P. A. M., *Discourse Semantics*, Blackwell, 1986.
- 寺津典子「言語理論と認知科学」, 渕一博編『認知科学への招待』, NHK ブックス, 1983.

用例出典

- Булгаков М, *Мастер и Маргарита*, Художественная литература, 1973.
- Горький М, “О первой любви”, *Собрание сочинений в тридцати томах*, 1951, т. 15.
- Достоевский Ф. М., “Записки из подполья”, *Полное собрание сочинений в тридцати томах*, 1973, т. 5.
- Пастернак Б., *Доктор Живаго*, Milano, Giangiacomo Feltrinelli Editore, 1958.
- Тендряков В., “Охота”, *Спутник* 1989, № 6, стр. 128-145.

Эренбург И., “День второй”, *Собрание сочинений в девяти томах*, 1964, т. 3.

Похлебкин В. В., *Национальные кухни наших народов*, М. 1983.

Наука в СССР, 1989, № 2.

Анафорическая функция “ЭТО” и личных местоимений русского языка

Кэйко МИТАНИ

ИГ (именная группа), которая обозначает конкретный предмет, относится к внеязыковому, актуальному миру через свое лексическое значение. Однако это отношение обнаруживается неоднозначно.

ИГ используется или как родовая денотация (CAT: categorial denotation) или как индивидуальная денотация (INDV). В рамках INDV реализуются денотация к неопределенному предмету (INDEF) и денотация к определенному предмету (DEF). DEF разделяется на три подкласса; (1) SPCi/j: как говорящий (i) так и слушатель (j) имеют в виду идентифицированный предмет; (2) NotSPCj: предмет известен говорящему, но еще не идентифицирован для слушателя; (3) NotSPCi/j: предмет, о котором идет речь, остается неидентифицированным для говорящего и слушателя, хотя у говорящего есть сведения о существовании какого-то конкретного предмета.

Обращая внимание на указанные денотативные типы, можно рассмотреть вопрос о распределении ролей как анафоры между “это” и личными местоимениями третьего лица (PP3) в биноминативных предложениях, т. е. предложениях со связочным глаголом “быть” и двумя ИГ в русском языке.

Этот вопрос трактуется следующим образом: если денотативный признак антецедента-ИГ — SPCi/j, употребляется PP3, а признак антецедента NotSPCj или NotSPCi/j, употребляется “это”. “Это” используется для отсылки к антецеденту с признаком SPCi/j и в случае, когда у говорящего есть намерение обозначать предмет как носителя какого-то признака, связанного с определенным контекстом.